

## 昭和女子大学出版会のこれから

さきごろ刊行した共同研究『夏目漱石 修善寺の大患前後』（令和 4 年 2 月 22 日）の「はじめに」にも記したように、昭和 9 年（1934）11 月創刊の「学苑」の発行が、昭和女子大学光葉会から、創立 50 周年を迎えて新たに設立された近代文化研究所の所管となったのは、昭和 45 年（1970）である。創刊以来、通巻 969 号を数えて、このたびの 970 号より、奥附に「昭和女子大学出版会」の名が印されることとなった。

わたくし個人の経験からすれば、文学を専攻する者、とくに日本の近代文学の研究を志す学徒として、学部大学院の学生時代に、「近代文庫」を擁する本学「学苑」掲載の文章をどれほど複写して読んだことか。今にいたるまで、本誌は枚挙に堪えぬ参考文献と資料の宝の蔵であり、その学恩は無量である。

月刊の「学苑」のみならず『近代文学研究叢書』（全 76 巻・別巻 1）の発行元であった近代文化研究所は、当然ながら歴とした出版社でもあったわけだが、この出版社としての機能がそのまま本出版会へと承継されたことも、あらためて銘記しておきたい。

大学出版部協会（一般社団法人）の正加盟大学は、2020 年 8 月現在で 26 校を数える。その濫觴は、明治 19 年（1886）創立の早稲田大学出版部（当初は東京専門学校出版局）であるが、学校の承認を得た同校の講義を通信教育における「講義録」のかたちで発行したのが始まりであった。

発案者であり、また長らくその主宰者であった学長の高田早苗は、学校創立 25 周年の明治 40 年（1907）、校外生（講義録購読者）のための夏期講習会で、次のように語っていた。

学校の内部の課目通りのものを整へて、恰も学校に於て講義を聞く如く順序立つたものに依つて学問をすると云ふ道の開けたのは、即ち日本に於ては東京専門学校の講義録と云ふものが嚆矢である。（…）此仕組は取も直さず今日欧米諸国で言ふ所のユニバーシティー、エクステンション、即ち大学教育普及 事業と称するものと、期せずして相合して居る訳である。

（『早稲田大学出版部 100 年小史』昭和 61 年 10 月 21 日）

在学生ではなく、校外生への「ユニバーシティー、エクステンション」すなわち生涯学習の方策としての講義録の発行は、高田が独自に案出したものであって、西欧にそのような方法があることを全く関知していなかったという。その後高田は、畏友坪内雄蔵（逍遙）、市島謙吉（春城）らの助けを受けながら、ときに大学当局と対立しつつ、よくこれを護り育てたが、講義録は、昭和 33 年（1958）3 月、最後の受講生の終了を俟って 70 余年にわたる長い歴史に終止符をうった。この出版部の主軸であった事業は、現在、早稲田大学エクステンションセンターへと受け継がれている。

今後、昭和女子大学出版会の進むべき道は、慎重な議論が求められるけれども、如上、最も古い歴史を持つ、この創立者人見東明の母校の事業から学ぶことは多いと思う。

このところ、本学の多彩な活動をいかに世に知らしめるのか、その発信力が問われているが、本出版会の中枢たる大学紀要「学苑 昭和女子大学紀要」（「学苑」の継続後誌）の発行と、教員の研究成果の公刊が、その最も着実かつ有効な手段であることを信じてやまない。

昭和女子大学出版会 運営委員会委員長 吉田昌志

